

DASSIHUNNYU

脱脂粉乳



電機

DASSIHUNNYU PRESENTS

2000

NISHI IORI.GEDOUOU M.AKUTANOE  
FOR ADULT ONLY



8.1

11.5/4 moon

17.7

21.

33.

39.

43.

西守

晶

のえ

M

のえ

西守

special  
thanks

10.てくてく

未成年の方による、購入、閲覧は  
固くお断りいたします

脱脂粉乳  
DASSIHUNNYUU  
PRESENTS

電機  
DENKI



終焉の偶像  
LAST OF IDOL  
西安





「ああ…まるで本当のディアナ様を犯しているようだ…」

地上に残ったディアナはある時数人の男たちによって拉致された…彼らも地上に残ったこの社会に適合できない哀れなムーンレイスだったこのディアナが本物のムーンレイス女王だということを判るはずもない彼らは望郷の念や荒んでしまった生活に対してのストレスやもろもろを謀らさずも真の女王に対して晴らそうとしたのだった…

「はあはあ…ディアナ様にはやはりそのお召物が似合います…」



# 電機 DENKI

目の前で精液にまみれてゆく、彼らにとってはあくまで代償にしかすぎない女はしかし、女王本人なのだから当然と言えば当然ながら…背徳心を刺激し嗜虐心を煽るのだった

そんな彼らに対しディアナはあらん限りの母性を示したが時を経つにつれ数の増えてゆく男達にそれも虚しく、気絶し弛緩してしまったディアナの粘膜に肉棒を突き立て、本来なら自分達から最も縁遠い筈のソコに狂ったように吐き出し続けた…



どのくらいの日が過ぎたか…  
ある時は身分高き者が戯れに、  
又ある時はダイアナカウンターに  
よって家族を殺され、  
家を焼かれた地球人達の  
都合のいい欲求不満の  
はけ口となった…

女王と呼ばれる性奴隷と  
なったダイアナの理性は  
すでに無くなっていた……



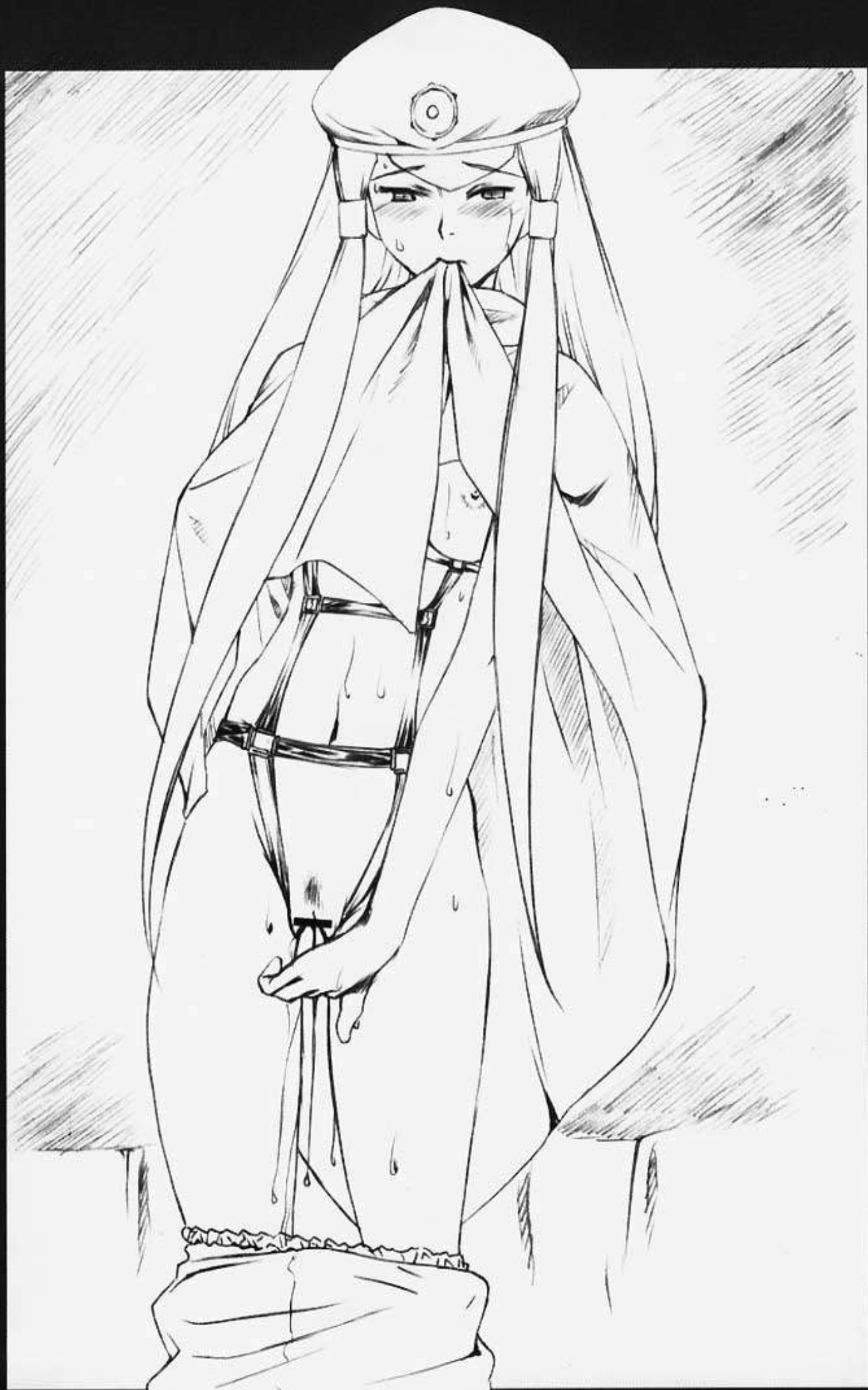
E N D



「ガンダムキャラではごっぱちつらんと  
描きにくそうなのがカワイミエーガー押し。  
じゃあ何で今回描けなかったのが…  
ネタも起こる時間がなかった…」

# 西安

「木漏れ日の樹」イイっあよ! 久しぶりに真面目に  
見ようと思えるアニメに出会えを感じ…  
女性キャラ(この言い方はなんかしっくりこない)  
が手塚っぽくないが、それが逆にイイ感じて  
「おせきどの」って感じ。記わがらん…





電機  
DENKI





5/4

turn "A" GUNDUM

# moon

Text

神酒 晶

Illustrated Gedoh-M





「ロラン、整備の方がホワイト・ドールの件で呼んでるわよ？」  
自分の主人、キエル・ハイムに声を掛けられたロランは一瞬、うろたえたが、すぐに、落ち着き礼を言って整備デッキの一室に向かう。

毎回違う人間を選び、自分を呼び出し、相手の記憶に極力残らないようにする。しかもホワイト・ドールは戦いの要である為に、修理や整備の回数は多く、かつ、黒歴史に深く関わりある、このMSの未知のテクノロジを、ムーンレイスの整備士に早々に判る筈も無く、パイロットであるロランが呼び出される事に疑問を持つ者はいるわけはなかった。

程なくしてデッキの整備員の部屋のインターフォンに話しかけるとすぐにドアが開いた。

「来たな……」

煙草を啜えた男はいつもと同じ表情、いつもと同じ動作でロランを部屋に通すとドアをキーをロックし、「入んな」と言葉とは裏腹に相手の行動を無視して奥のドアに向かって乱暴に背を押される。蒸せるような汗とオイルと煙草の煙とアレの匂い……何度、この匂いを嗅いだかすら憶えがないのに、何度嗅いでもこの匂いには慣れなかった。

5/4 moon



「ソシエ……ソシエ……」

奥の部屋に入った途端、もう一人の主人ソシエ・ハイムが若い整備員に口を犯されていた。

入ってきたロランにソシエは気づいたが、無論、声をあげる事など、できはしなかった。

「おっ、ロランが来たら、このお嬢さん急に舌がよく回るようになったぜ？こりゃーお嬢さまより淫売の方が性にあってンじゃねーのかア？」

「うあっ！あ、アタシは別にロランの事なんか……うぐっ！」

「オラ！お嬢ちゃんよ、お喋りなんかより舌に気合入れてくれや」

秘部に足の指を入れられ、もがきかけたソシエの頭を押さえつけ再び口を塞ぐ。

「んぐっ……んっんっ……んぶう！」

「あ、ロランも可哀想になあ……こんな跳ねっ返りが、ご主人様じやよオ、姉ちゃんの方とは大違いだな」

(……ソシエお嬢さん……申し訳ありません……)

結果として、このような狂事に巻きこんでしまったのは、ロランに責任がないわけではない。

だが、これ以上の被害者を増やさない為にも、ロランに逆らう事は出来はしない。「んっ、んんっ……ゲホっ！ゲホっ！」

ソシエが頭を振るわせると同時に口を塞いでいた男が果てたものの、堪らず蒸せて吐き出してしまふ。

「フン！妹は嫉が出来てねえな……お仕置が必要だな……オラ！」

ロランの後ろに立っていた男が、ソシエに近づきアヌスに指を深く差し込み、乱暴に掻き回す。

「ひ、うあっ……くっ……はああっ、ダメええっ……んああっ！」

「何がダメなんだ？ますます、尻の穴だつてえのに締め上げてくれるじゃねえか？」

「ふあっ……ちがっ……ああんっ」

「最初の頃はギャーギャー泣いて、ロランくろランって叫びまくってたのに、今じゃ自分からヒーヒー悦んで腰振って、お嬢様の皮被つても、所詮こんなモンか？」

そう言うとき、指をアヌスから抜き、突然ロランを押し倒しスポンと下着を剥ぎ取る。

「な、何をするんですか！？」

自分の主の行為を見て勃起してしまつた事に対する羞恥と自分の股間に突然手を入れられた事から思わず股間を隠そうとするが、男にあっさり跳ね除けられた。

「おお、コチコチじゃねえかなあ？おい」

慌てて目を背けるロランを押さえつけ、ズボンを乱暴に剥ぎ取る

「へへへ……お嬢さんよ、見てみるよ？アンタの使用人はギンギンだぜ？……って」

ソシエを攻めていた男が、ソシエの口からベニスを抜き、ロランの股間の前にもつていく。

「ほら、お嬢さんよオ、アンタの使用人がアンタとオレの見て興奮しちまつたらしいんだ……誉れ高きホワイト・ドールのパイロットだぜ？たまにはサーピスしてやんなよ？ほれ」

「んぐうっ！」

のを無理矢理、口に含まされた。

「ロランには戦いだけじゃなくて、こつちでも世話になつてからな、お嬢さんも鼻が高けえだろ？へへへ……良い使用人だぜ、気合入れてやりな……下の方はオレがサーピスしてやるよ、ほら！」

ソシエを四つん這いにさせ、後ろから、突き上げる。

振動がロランのベニスに更なる刺激を与える。

「うあっ！ソシエ……お、お嬢さん……はっ激し過ぎます……くあっ！」

淫靡な舌の音と微かな空調の音、そして整備員達の二人を嘲笑う声の二人の耳に木霊する。

「ロ……ロラ……ん、んっ！は……ふう……ああ……んっ……んっ……はあうっ！お嬢さん……ボク、ボクもう……」

激しく尻を貫かれ二人とも限界寸前だった。

「けっ！こーなるとただの淫売だな……二人ともさっさとイっちゃいな！そら！」

煙草を啜えた男は再び、アヌスに指を突っ込む。

「ひぎっ！いっ……いっ……ふああああっ！」

「ソ、ソシ……お嬢……さ……うっ……うああっ！」

二人同時に果て、ロランは、ソシエの口腔に欲望を惜しみなく、吐き出した、ソシエは顔を歪ませながらも飲み干す。

「ちっ！オレは、ロランに譲つちまつて、まだイッてねえつてのに……まあ、いい……今日はいつも見物人のロランに礼をしようと思つてたからなア、まだまだ続きはタップリと用意してある。ほら二人ともこつち向きな」

ロランはフラつきながらも男の指示に従つたが、ソシエはうつ伏せのまま、だらしなく足を広げて荒い息遣いのまま、耳に入っていないようだった。

「オマエのご主人も所詮は口だけだったようだな？どんなにデカイ口を叩いたつて片田舎の小せえ領主だろうに……オメーも苦勞してんだらうなあ……へへへっ」

「……くっ……」

侮辱の言葉すら、今に始まつた事ではなく、何度となく抗議し時には拳を振りかざした事さえ、あつたが、その度に自分には何もせず、ソシエが辱めを受けるのだった。



「へへっ、ロラン判ってきたじゃねえか、使用人は素直と従順が一番だぜ……ほら」

男が脱力してるソシエを抱えあげ、濡れ光る股を大きく開かせる。  
「ほら、こいよ、ロラン？お嬢さんは準備OKだしよ、オレもイキそびれちまったからな、こっちの処女は、まだだったな……いただくぜ」

呆けてるソシエのアヌスが突然、貫かれる。

「くああっ！……うっ、た、助けて！ロラン！……痛い……痛いよおー」

ソシエのアヌスからは赤い朱線が滴っていたが、秘裂からは蜜が更に溢れ出す。

「痛がってるワリには、こっちはビシヨビシヨじゃねえか」

整備員が後ろを突き立てながら秘裂をこじ開ける。

男が目配せすると、もう一人の男がソシエの秘裂に薄いピンク色の

液体を塗ると、痛みにもがくソシエの意識にむず痒い感覚がよぎる。

「な、なに？何をしたの……」

「なあに、これから楽しくなる為のモンよ」

危険な薬でない事は容易く想像できたが、自分の恥ずかしい部分に塗られたのだ。不安がよぎる。

「ククク……ほら、ご主人様にココにタップリと流し込んでやんな」

ソシエのあられもない巣が姿でロランのモノは出したばかりにも関わらず、既に屹立していたが、主人の秘裂を貫く行為は使用人の立場

からなのか、ギャバンの事を気にしてなのか、目は背けたままだった。

「どっちもスタンバイOKみてえだが、自分からは、ダメらしい、ほら、お嬢さん自分で、おねだりしてロラン命令してやれよ」

「そ、そんな……（でも逆らったりしたら……）判った……いえ、判りました……ロラン、おいで」

痛みと屈辱に必死に耐えながら、震える手でロランのペニスをそっと握る。

『……ロランの……おっ……おおきい……』  
躊躇いながら迎え入れようとしてる時に、唐突に秘裂に突き入れられる。

「モタモタしてンじゃねえ！」

ロランの背中を男が無慈悲に蹴りいれる。

「ふあああああ！お、大きい……口、ロラン大きいよう！」

「お、お嬢さああん！お嬢さんの中、熱くて……きつくて、はああ！」  
後を攻めていた事など忘れたかのように、互いを貪り合う二人だった

が、そこで二人間に新たな動きが加わる。  
「おっと、オレを忘れちゃ困るなあ……ロランが頑張ってくれたお陰

で、だいぶ痛みも紛れてほぐれて、いい具合になってきたぜえ」

「ロラン……ロランお腹が、苦しいよう……んっ……んぐっ、んう」  
ソシエの苦しみを分かちあえない以上は、快楽に酔わせる事ぐらいし

か、してやれる事はなく、激しく唇に舌を差し込み吸う。

激しい攻めの中で、ソシエの下腹部に異変が生じる。  
「ん……んぶばっ！お、お願い、トイレに行かせて！」

二人に挟まれて攻められてるソシエにとって、逃げ出す事はできない。  
「トイレに行きたければ、オレ達二人をさっさとイカせてみせろ！そし

たら行かせてやるよ……ただし、先にイッたり、ここで漏らしたら……  
大変だぜえ？おら！気合を入れて締め上げるよ！」

「そ、そんな……やッ……ふあっ……」



ソシエは自分がイッてしまわないように、漏らしてしまわないように、ただ、それだけを祈りながら、自らの腰を激しく振る。

「はあ……はんツ……早く……イッて……でない……アタシ……も、漏れ……ちゃうよお……」

「ボクが早くイケば……お嬢さんが、少しでも楽になる筈……」

「フン、こっからが、本番だぜ」

「おっ、お嬢さん……ほ、ボクもう……」

「くっくっく、さあ愛する主人の中にとっぶり出してやんな、オレもそろそろ限界だぜ……くっ」

「で、でちゃいます！うっ、おっ、お嬢さん、うあああああっ」

どくっ……どぶっ……どくどく……

領主の娘とは思えない程、はしたなく足を大きく股を広げ、秘裂とアヌスから、ソシエの身体では、抱えきれない欲望が白く吐き出されていき、絶頂をなんとか耐え、股間から白い欲望が滴り落ちるのすら、気にせずトイレに向かう姿は、陵辱はされても、人前で放尿するなどという恥辱には耐えられない為だろう。

「そこまで、耐えたのは誉めてやろう、お嬢さん……だが、ここまですぐ男がボケットから小さなスイッチを押すと、微かに力チリと鳴るとすぐにソシエに異変が現れた。

「ふああっ、い、いやっ」

陰部の小さな肉芽に電流が走ると、力が抜け崩れ落ちる。

「さっきお嬢さんに塗ったのは、このスイッチとリンクしててな、塗ると軽い電流を流せるシロモンで、な……本来はオレ達の商売道具だ。ただ、なあに……黒コゲになったりはしねえから安心しな、だが……塗った場所が場所だ……次で耐えられたら、お嬢さんの勝ちだぜ」

しかし、ガタガタと震えながらも、犬のように這いずりながら、トイレに向かっていく。

「がんばるじゃねえか、だが、これでおしめえだ」

もう一人の男が、ソシエの片足を担ぎ上げると同時に「カチリ」とスイッチの音が鳴るとソシエが身を震わせ、股間から勢いよく、黄色い滝が流れ落ちてく。

「いや、いやあああああ」

ぶしゃあああ

「随分、我慢してたんだな……こりゃスゲエ！」

「みな……で……みないで！見ないでエー！」

そう叫び、仰向けに倒れると、何かを咳いているようだが、聴こえない。

「お嬢さんがソシエを抱き起こし、必死に揺さぶる。

「お嬢さん！ソシエお嬢さん！」

虚ろな瞳で天井を見上げている。

「これで、オレ達の勝ちだな……よかったなあ、ロランよ？小生意気な人だったけど、筆下ろしは無事、終わったな。」

「こ、こんな……酷い、あなた達はこうしてこんな事が出来るんですか……ボクはボクは貴方達を許す事ができない！」

「おおっと、何を怒ってるんだ、ロラン？それに、今日はオメーの為の仕掛けが、まだ残ってる、ほらよ」

部屋の片隅にある、ロッカーを突然、開け放つとそこから出てきたのは、

月で再会した幼なじみの、ドナだった。





しかし、別人のような姿に驚愕する。

首には鎖付きの首輪がつけられ、秘部は水溜りが出来る程の染みが広がっていた。

秘部を隠す事無く、立ち上がりそのままロランに近づくと、ロランのペニスを扱きはじめる。

「や、やめるんだ！くあっド、ドナ！やめて、君まで……そんな……」  
ロランの声が無視するかのようになり、手の動きに口の攻めが更に加わり更にロランのペニスに激しい刺激を与える。

「はむっ、んっ、んむっ、ふむっ」

ソシエと違い、獣のように羞恥の感情すら無いかのように激しく音を立てペニスと秘部を愛撫する。

やがて、ロランをそっと仰向けにすると、恥じらいもなく股がり、股間をロランの顔の前に押し付ける。

ロランの視界には激しく蠢く秘裂からと滴り落ちる愛液。  
淫靡なその仕種やペニスを扱きながら、自分の秘部に指をまさぐる姿はかつて知っていた、幼馴染の姿ではなかった。

「差し入れを持ってきてくれた迄はよかったんだがなあ……お嬢さんと遊んでるトコを見られちゃまってよお、仕方ねえんで、お仲間に入ってもらったんだが、ハナから才能あったんだな……今じゃ自分からコレだぜ？」

「ドナ、我慢しなくていいんだぜ、くっくく」

「や、やめるんだ……こ、こんな事……していいワケ……くああ」

ずぶっ

濡れ光るロランのペニスに自ら当てがい、激しく腰を振り始める。

「あああっ！大きい、こ、こんなの……はじめて……すっ凄……」  
ロランの事は既に自分の欲望を満たす道具の一人としか思っていないように、ロランの呼びかけには、まるで答えない。

ドナはロランの手を掴むと自分の手を握らせ、自分の足を開かせる。

「みて！クチュクチュいってるわたしのココを覗てエ！」

既に羞恥の欠片も残っていない。  
「イっ、いっっちゃうっ……出して！奥にいっぱい出してエ！」  
膣がギュッと収縮すると二人同時に絶頂に達する。

……

「オレ達からのプレゼントだ、これからたっぷり可愛がってやるよ」  
この狂った宴は終わる事はない。

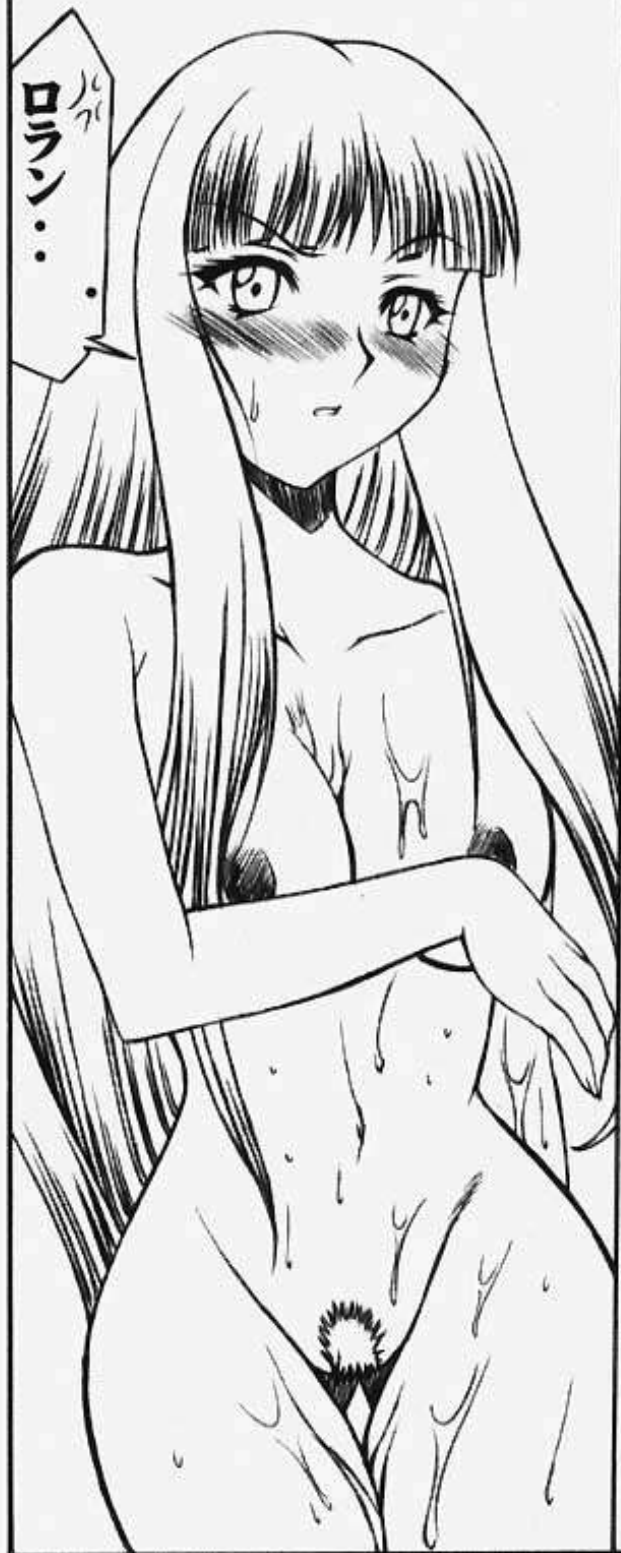


たしかこんな感じ

阿久多のえ







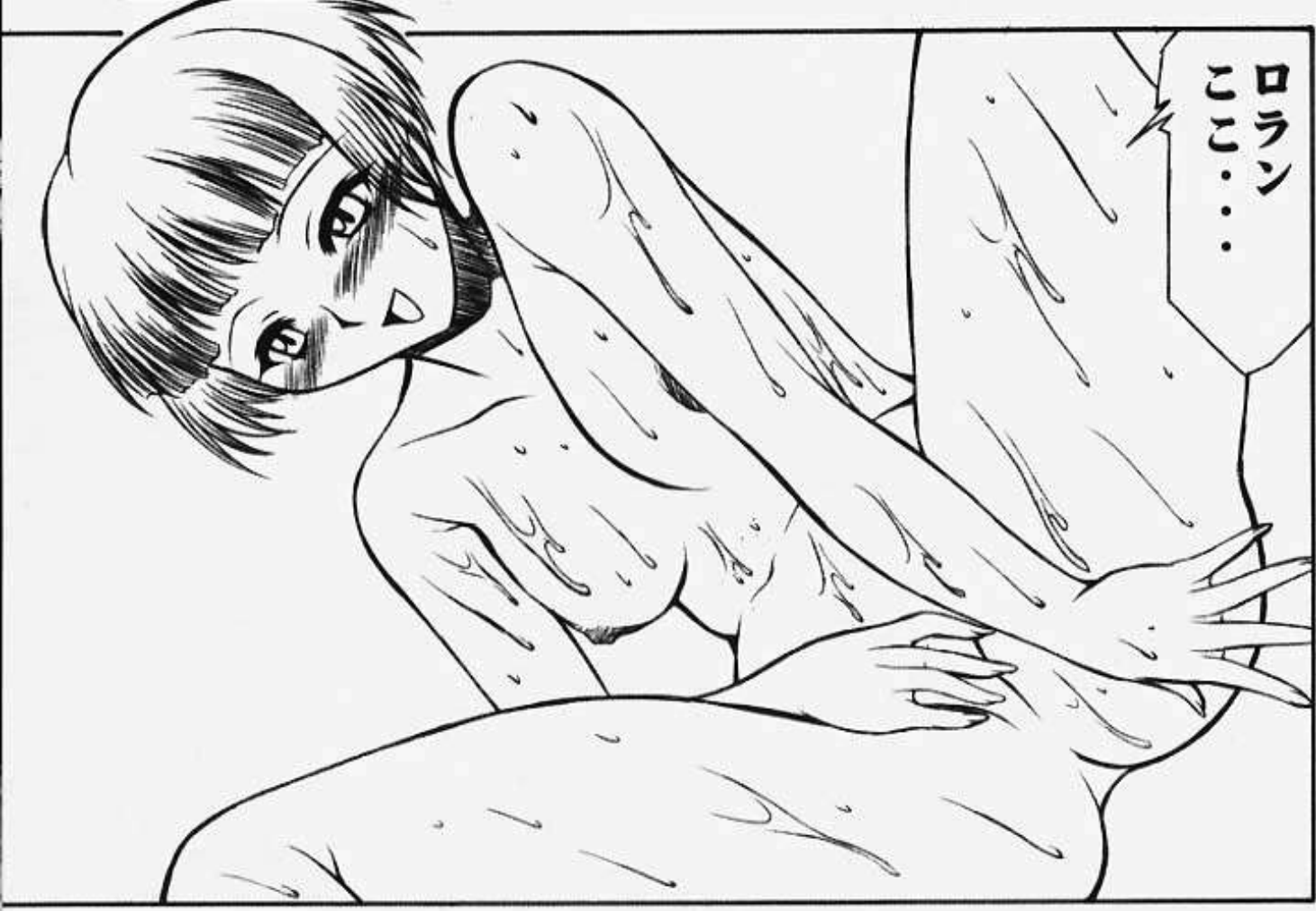


あつ



さあ

覚悟なさい  
ロラン



ロラン...  
こんこん...



あ  
あ  
あ

あ

あ  
あ  
あ

僕……  
犯されちゃい  
ました

ディアナ様

ル—ル—ル—





# UNNDAM

「エンゲージ・リング」

外道王M





大丈夫ですか？  
ロラン…

ディアナ様、すみません  
…今起きますから



いいからじっとしていなさい  
まだ熱があるのでしょぅ？

いつもあなたには迷惑を  
かけているのですから  
このような時ぐらいは  
面倒をみさせなさいな

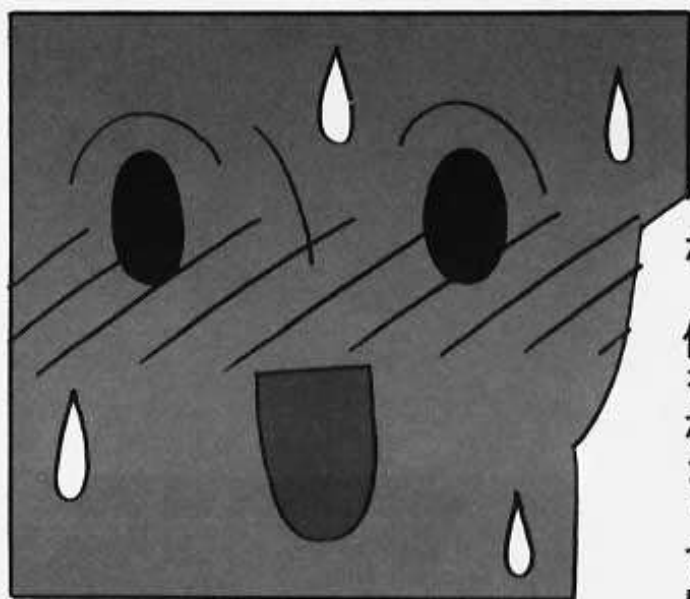
ディアナ様…

翌日

熱がこんなに下がらない  
なんて…

ロラン…





デイ、ディアナ様ツ！  
な、何をなさっているんですかっ



風邪をひいてしまいますよっ！



早く服を着てくださいっ！



いいのですよ、ロラン  
そのつもりなのですから……



私に風邪をうつしなさい  
ロラン…

えっ？

昔、本で読んだことがあります  
風邪は人にうつせば治ると…  
それには\*\*\*をするのが  
一番だと書いてありました



だから…その…

私は…



なら  
大人しくなさいな

あ…



ディアナ様、でも…

私にされるのは

いや…なのですか？

いえ、そんな…



うん…

ん…



うふ、もうこんなにして…

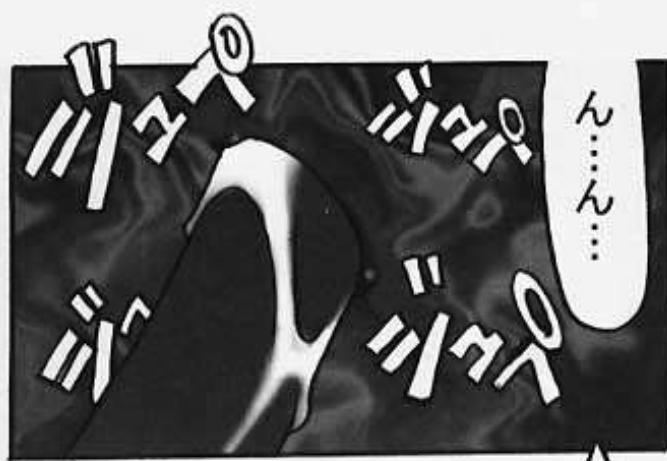
ディアナさ…ま…  
そんな、汚い…です

あなたのモノですから  
ん…平気です





ん…ん…



ディアナ様…!



ディアナ様っ  
僕…僕、もう!

うふ、たくさん出しましたね



すみません…

おはっ

おはっ

誤ることはないでしょう？  
それに…  
まだ私に風邪はうつっていませんよ



あっん!  
ん...あっあっ

ディアナ様!  
ディアナ様の膣っ!  
熱くて、ヌルヌルして...  
気持ちいいですっ!  
たまらないですっ!

ロラン!  
んあ...ロラン!  
ああっ!

あっん!ああっ!  
あああっ!

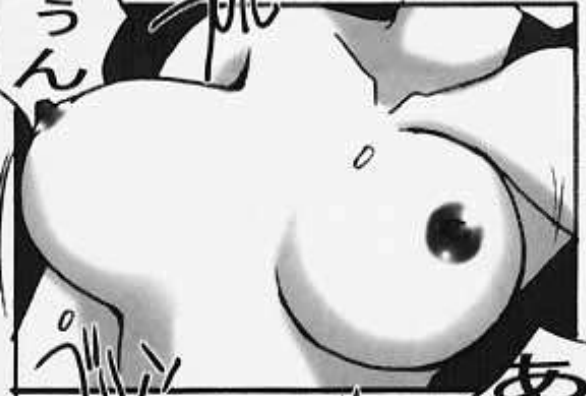
ロラン...もっもっ...  
もっもっもっもっもっもっ!  
あっん!  
そ、そっです...



あーっ  
あーっ



あーっ  
あーっ



あーっ  
あーっ



あーっ  
あーっ



あーっ  
あーっ  
あーっ  
あーっ

ロ…ラン、  
ロラン！  
いいです、  
いいですうっ！

ディアナ様！  
ううっ！

あん！

あーっ  
あーっ  
あーっ



あーっ  
あーっ





あんっ!

ディアナ様あつ!

うん!  
あん!

あう!  
あう!  
あう!



ああっ!

だめえっ!

気持ち...いいあ  
ああああ!

あうあああ  
あう!

あうあああ... ロラン...

あつー！  
もう…だめえ…っ

あああああああつー

ディアナ様っ！

ほ、僕も…！

あ  
あ  
あ

あつー…ああつー

いっちや…いっちや…



少しは  
良くなりましたか？

え…あ、はい

ディアナ様、でも  
こんな事  
僕となんて…

クス

ロラン

私…まだこの返事を  
していませんでしたね



いえ、そんないいんですよ  
僕はこうしてディアナ様の  
御側にいられるだけで…



…ロラン・セアツク  
これが最後の命令です  
今日からは…  
ディアナ、と呼んでください

ディアナ様？

ディアナ…です



好きよ、ロラン  
ずっと私の側に来てくださいね



これがその返事…  
これからも  
よろしくお願ひしま

えっ…？





# Destruction Romance

阿久多 のえ



















end

電機  
DENKI



西守  
NISHI IORI

イヤ・ン・バック・ン

サイト

おまけの罫



H絵とは基本的には見た人に劣情をいだかせるために  
存在する、と思っておりますが、絵の描ける人は自分の  
絵に劣情を感じることが出来るのだろうか？  
とが、そんなこと考えながら描いているとわいとハード目、  
時にはあっちの世界の絵を描いてしまいます

# 電機 DENKI



今回の電機は珍しく  
ポインポインなので  
ローな奴を一発。  
この辺は最近ヤバげ  
なのでこの所ブニブニ  
でクリクでキツキツ  
なのばやい…らしい。



ほう、先ほどはあ、  
清の所をすてえ

このこ、  
すてえ



おまのの



おん



電機  
DENKI

こいつらでなんがやろかな……  
と考えていたガイマイチ氣が  
乗らないのでこの場にて公闘。  
嫌いになったわけではない。  
川の畔野郎…一番重要。

おまけの闘

天



電機  
DENKI

ゴ



前回出したトリマーメイド本で  
惜しくも使われることなく  
ファイルの肥やしになっていた  
カットラフ達。  
こういう可哀想な奴らが  
結構いる…  
そのまま腐っては彼女等も  
成仏出来ないのが、  
この場にて昇天。



おまけの罇



**For Adult Only**